新しい海民の歴史を目指して

全国漁業協同組合連合会 元常務　浜崎礼三

昨年(2012年)12月、拙著『海の人々と列島の歴史―漁撈・製塩・交易等へと活動は広がる―』をようやく刊行することができた。この著作を何故に書こうとし、この10余年悪戦苦闘したのか。この執筆の契機ともいうべきものについて考えてきたところを述べさせていただきたいと思う。

1　執筆の契機、その第一

少なくとも、船乗り、漁撈の民、など「海に生きた人々」の歴史は、古くは語りつがれ、また文字の時代に入って以降は神話・歌謡など多くの文献にかなりのウェイトをもって述べられ展開されている。そして現在、多くの先覚者によっていわゆる漁業史、また海民史など数々の著作があり、また特筆すべきものとして、広く海民の歴史を「日本の歴史を大きく開拓した存在」として追求した網野善彦氏の活躍などは数々の著作・論文によって余りにも著名である。

しかし、これらの先学の御努力、数々の著作の存在にもかかわらず、現在多くの人々によってこれら海民の歴史を語った著作が広く読まれているかというと決してそうは見えない。その理由は色々考えらえるが、主たる要因は第一に多くの著作がかなりの年月を経過して、その様式・スタイルが古くなり、またその殆どの著作がかなり、学術書的な傾向を強く持ち、とくに歴史についてある程度の素養を持たなければ、その内容について理解することが中々難しい、ということによるものと見て宜しかろう。

筆者が漁協の役職員、また漁村地区の各種学校の教職にある人々をはじめとして多くの人々に「海を働きの場、生活の場として、そこに生きた人々―船乗り、漁撈の民―の歴史」を読んでもらうためには、今までとはかなり異なった格段の配慮が必要ではないかと考えた所以もまたそこにある。

2　第二に、具体的に、人々が求めているもの、読んでもらうために必要なもの、は何か。

(1)　海人達の活動と各時代の基本的背景

端的に言って、海人集団「海に生きた人々」も彼らが生存し、活動した縄文・弥生・古墳をはじめとする各時代と無関係に、―船乗り、漁撈の民など―として働き、生活したわけではもちろんなく、それどころか各時代における人々の要望、その願いを果たすべき尖兵(せんぺい)として彼らは活動し、命をかけて働いたと見て間違いないところだと思われる。

すなわち、それぞれの時代の海人集団の活動状況を知り、理解するためには、各時代がそれぞれどのような時代であったのか、人々が何を望み、欲求した時代であったかを知ることが必須だということである。

(2)　具体的事例

紙数の制限もあるが、具体的な叙述も必要であるので、ここで弥生時代の後期(１～３世紀中ごろ)と、古墳時代前半期(３世紀後半～５世紀)を選び、その時代の基本的性格と海人集団の活躍との相互関係を極めて大掴みに見てみよう。

(その一　弥生後期)

弥生の後期、その始まりの頃から気候は急激に冷涼化し、豪雨など災害が多く、列島の人々が荒廃した田畑の復旧、新しく農地の開発に苦闘し、すぐれた生産手段としての鉄器(鋤・鍬など)の入手に人々が狂奔するという経済的苦境にあった。一方、政治的には列島でもっとも政治的・文化的に進んでいた北九

農林中金総合研究所
http://www.nochuri.co.jp/

州政権が頼りとしていた中国大陸の後漢帝国は、北方からの異民族の襲来、内部後宮の宦官の横暴によって大きく乱れ、列島内部の各勢力は、その頼りとすべき権力・後見者を何処に求むべきか、右往左往していたのが、弥生後期(とくに２世紀)の情勢であった。

このように、列島の人々の迷い、悩みが大きかったなかで、海人集団がその機動力・行動力をもって、瀬戸内海を中心として、列島西部の海を縦横に動き回り、クニ・国に貴重な情報を伝え、またその生産した食塩などを換えた鉄素材・鉄器をもたらし、後の列島の国家形成に連なるヤマト・キビ連合政権の確立に果たした役割は大きかった。

（その二　古墳時代前半期）

３世紀後半から５世紀末までの古墳時代前半期、建国以降未だ新しいヤマト王権にとってとくに大事なのは半島ルート(半島南部との交易)であった。３世紀の終わり、それは北九州の政権から畿内の政権に完全に取って代わられた。政権は鉄をはじめとする必要な物資・資材、さらには先進技術・威信材を独占し、それらを列島各地の首長たちに再配分する機能を通じてその支配力を強め、さらに国内統一を強化するという国づくりの政策をとった。海人集団は、ヤマト王権による国づくり政策の担い手、尖兵として輝かしい使命を課せられたといってよい。

そして、造船・航海、さらにヒト・モノを運ぶ運輸能力など各種のすぐれた能力をもつ海人集団はその使命をほぼ見事に果たしたといってよい。そして大事なことは、その使命は国内的にも同様にまことに目覚ましく果たされたということである。

とくに４～５世紀、瀬戸内海を主として多くの沿海の地に、また河川の要衝の地に、多くの古墳の出現を見ることができるが、輩下の海人たちを駆使して、漁撈に、製塩に、また諸物資の輸送に、奔走した首領たちが、死してなお、生前活躍の場としての海域・みなとを見続ける場に築造されている。

以上実状に即して述べたように、拙著は「それぞれの時代の背景に即して海人集団はどのように活動したのか」という彼らの現実の活動を描写することを第一の主眼としている。

3　だがそれは中々難しかった

しかし、現実問題として歴史的に、各時代毎に、その基本的な性格と海人集団の働きを結びつけて述べるという基本的な方針は中々「いうは易く、行うは難し」でまことに容易でなかった。

いうまでもなく、各時代の特長・背景については、多くの史家、研究者の努力によって数々の史料・著作が積み重ねられ、その取りまとめは労をいとわなければ可能である。それだけ、ともすれば時代的背景の方の叙述が多く主流となり、海人集団の叙述が従となり、そこには海の匂い、潮の香は薄れ、主客転倒してしまう。その点に留意して各時代毎に「漁撈の民」についての項目を起こし、その叙述に努めたが、必ずしも成功してはいない。

4　結び

この著作は、その終結を中世の、当時「浦と呼ばれた漁村の成立」に求め一応の結びとしている。列島の場合、戦乱打ち続いた中世において、奇跡的ともいえるさまざまな経済的発展・成熟の上に、13～14世紀以降、商品・貨幣経済の普及・滲透が進み、そこに近代の漁村に通じる沿海の海民(漁撈民)集落が14～15世紀続出するという状況が見られた。

その後、戦国時代、安土桃山時代、さらに近世、江戸時代を経て近代へと進む次第であるが、その間を通じ、「それぞれの時代の基本的背景と海人集団の働き」を一貫して追求することによって、必ず海人集団の活躍の歴史的意義を把握でき、それはまた四面環海の日本列島の発展の歴史との関係究明に大きく寄与するものと信じて次の作業へと進みたいと思う。

（はまさき　れいぞう）